

松野敏之『朱熹『小学』研究』に対する批評

梅村 尚樹

一、総論

朱熹のいう「小学」とは、「大学」の学問を修める前に人として身につけておくべき事柄であり、つまり「大学」の前段階に当たる教育課程を指す。朱熹は『四書章句集注』を編纂して「大学」の教育課程を明らかにしたが、その約一〇年後に『小学』の編纂にとりかかったというから、本書が主題とする朱熹『小学』とは、自己修養をするための土台をどのように身につければよいのか、朱熹自身が示した書ということになる。そうであれば朱子学や朱熹の思想を理解するに当たって、『小学』の理解は欠かせないものとなつて当然であるが、それにもかかわらず朱熹『小学』はこれまであまり研究者の関心を惹いてこなかった。その理由としては、そもそも現行の『小学』が、朱熹の手による著作とは考えられてこなかったこと、また『小学』の内容はほとんどが先行する各種文献から引用した抜き書きに過ぎなかつたことに求められる。現代から見れば、『小学』を読んでも新たな発見が得られるようには感じられず、しかも朱熹

の思想をどの程度反映しているのかも不明となれば、多大な労力をかけて分析するのが憚られるのも無理はない。

本書の「あとがき」によれば、著者が本研究に着手したきっかけは、自身の担当する演習授業において『小学』をテキストに選び、古典籍の訓練として学生に典拠の調査などを行わせたことにあつたらしい。そうして授業を進める中で、先行する文献と『小学』に引かれる文章の間に少なからぬ異同があることに気づき、徐々にその意味を理解していったという。

こうして始められた研究であるが、結果として著者は、『小学』が朱熹自身によつて全体の構成が練られ、細かな部分まで手を加えて編纂された書であることを明らかにした。さらに、そこに現された朱熹の意図がどのようなものであつたのかを、丁寧に検証して見せたのである。とりわけ、『小学』に引かれる文章を引用元の原文と全て対照し、引用の一部には朱熹による意図的な改編の跡があることを明らかにしているが、『小学』は全部で三八六章にもわたるため、各条の典拠を確認する作業は多くの労力を要したはずである。しかもその作業を通して、朱熹が編纂するに当たっては、原典とな

る各経書や史書のみならず、司馬光『書儀』『家範』など先行する類似の編纂物も参照していることが明らかになった。この点は朱熹の思想形成を考える上でも重要な指摘となり得るものである。

このように、本書は多くの文献を博搜し、それをもとに朱熹『小学』を朱熹の思想の中に位置づけること、さらには後世まで含めた朱子学全体の中に位置づけようと試みるものである。本来ならば、朱熹の思想において『小学』がいかなる意味を持ったのか、そういった点に重心を置きながら本書の意義を評する必要がある。しかし、この書評はあえて専門の異なる複数の評者を交えて企画されたもので、さらに結果的にそうなったに過ぎないが、各担当者が批評する章を分担して行われることとなった。評者の専門は宋代士大夫社会を中心とする歴史学であることから、思想面の批評については他の評者に譲り、本稿では歴史学の視点から若干の批評を加えることとして、主に第三章第三節の「朱寿昌譚」と第六章の「元明清時代の『小学』」について具体的に論じ、最後に全体を通じた感想を述べることにしたい。

二、「朱寿昌譚」について

本書第三章は『小学』における孝を論じた部分であるが、その第三節「朱寿昌譚」は、先行する文献から『小学』に引用する際の様子や方を実例をもって示した節である。ここからは、実際に朱熹が引用に当たったどのような改編を加えたかを具体的に窺うことができる。また朱寿昌の生きた時代、つまり北宋期の士大夫の交流や政

治状況も視野に入れて論じられており、朱熹が比較的近い時代（北宋期）のことをどのように認識していたか、その一端を垣間見ることがもできる。

朱寿昌譚は、後に「棄官尋母」と概括される話で、生き別れた生母を訪ね当てるために官僚をやめ老母を養った、朱寿昌という人物に関する孝行譚である。本書では、朱熹がこの話を『小学』に引用する際に一部節略が見られることから、これを重要な手掛かりとして朱熹の編纂意図を推測している。この行論自体には問題は見られず、朱熹は『小学』に朱寿昌譚を採録するに当たって、仏教を連想させる部分や超自然的な部分を一部削除したという結論に誤りはない。

評者が関心を抱いたのは、その引用の際に朱熹は『東都事略』巻一一七に載る朱寿昌伝を参照しているように見える点である。というのも、朱寿昌に関する情報は『宋史』巻四五六の朱寿昌伝がまぎらず挙げられるが、さらに『統資治通鑑長編』（以下『長編』）と略記（巻二一二、熙寧三年六月壬戌の条にも見られ、各史料でやや異なる情報を伝えているからである。

朱寿昌譚のもととなった歴史事実は本書でも紹介されているが、上述の史料などを比較すると、さらにいくつかの情報も補足してより具体的な状況を確認することができる。まず朱寿昌の官歴については、『宋史』の記述と『東都事略』の記述では異同があり、『東都事略』の方がやや詳しいが、時系列が確認しやすいのは『宋史』の方である。それらによれば、朱寿昌は父の恩蔭によって出仕し、最も低い寄禄官（官僚としての位階を示すもので実職とは無関係）である将作監主簿を与えられ、知招信県や劍州・陝州・荊南軍の通

判（州の次官）を経て、知閩州、知広徳軍と職歴を重ねた（『宋史』では権知岳州の職歴と、その際の治績が書かれるが、『東都事略』にはこの職歴は書かれない）。この知広徳軍の時に、朱寿昌は少なくとも五十代の後半になっていたが、生き別れて五十年以上も会っていない母を訪ね当てるために棄官したという。

ただし『長編』の当該条には、「知永興錢明逸表其孝節、且言、『壽昌稱疾尋醫棄官、而尋醫法須二年、乃赴御史臺看驗。乞不俟尋醫限滿、復其差遣。』とあるため、実際には朱寿昌は病のために医者を探すことを理由に特別休暇を申請したのであり、二年後には復職が認められる予定だったと想定される。しかし母を訪ね当てることができたので、その「孝」によって二年を待たずに原職に復職させるべきというのが、『長編』が記す錢明逸の発言の主旨である。当時王安石は、自ら抜擢した李定が母の喪に服さなかったことで非難されていたために、政敵との間に政争を抱えており、母に孝を尽くした朱寿昌をよく思わなかったという。

その結果、朱寿昌は原職に復すのではなく、審官院にその判断が委ねられた。結果として、「壽昌前已再典郡、於是折資通判河中府、迎其同母弟妹以歸。」とあるように、河中府の通判の職を与えられて、母とその一族を迎えて暮らすことになったのである。この場合、「折資」は資序を減じることを意味し、要はすでに知州クラス職歴が二度あるため、順当ならば知州クラス以上の職に任命するところ、それより下位の職である通判を与えたということであり、王安石への一定の配慮が窺える。とは言え、河中府は州よりランクの高い次府に相当し、何よりも朱寿昌の母が暮らしていた同州に隣接する。しかも府庁の置かれた河東東は同州との州境に位置し、同

州にほど近い。『宋史』朱寿昌伝には「壽昌以養母故、求通判河中府」とあるように、朱寿昌の方から母を養う目的でこのポストを要求したことが書かれるが、原職の知広徳軍でも知同州でもなく、河中府通判を与えたところに審官院の落としどころを見ることができ

る。なお朱寿昌のその後の官歴を確認すると、母が亡くなった後は知鄂州を務め、その後は実職を伴わない提舉崇禧觀となっている。それと並行して寄禄官も正六品相当の司農少卿に昇進し、元豊官制改革後には朝議大夫、次いで従五品の中散大夫まで昇進している。本筋とは無関係であるが、この点に関して本書一六八頁の「河中府通判、知鄂州、司農少卿などを歴任した」とする記述は、寄禄官と職を混同しているもので、一応注意を喚起しておきたい。

話を戻すと、朱寿昌の官歴を見れば、恩蔭出身の人物に典型的な、地方官として長期間にわたって下積みを経験し、一度も中央官を経験することなく中下級官僚として一生を終えるような人物であったことがわかる。それがこのように脚光を浴びることとなったのは、やはり当時の政治状況や、祖先祭祀・祖先孝養が重視され、それが政治とも直結する社会状況になったことの現れだと考えることができる。そもそも王安石の抜擢した李定が母の喪に服さなかったことが政治問題化したこと自体、そうした状況の反映であるとも言えるし、類似の案件としては、熙寧三年に蘇軾が服喪明けの途上で商売をしたことが、王安石一派の謝景温に弾劾された事件が思い起こされる。朱熹をはじめとする南宋の人がこの朱寿昌譚をことさらに取り上げたのも、王安石らによってその「孝」が正当に評価されなかったことを一つの要因と想定するのは考え過ぎだろうか。

以上のように、本書の分析に加え、歴史事実には照らしながらこの話を読むと、その背景がより詳細に見えてくる。この朱寿昌譚はおそらく朱熹が引用したことにより、後世まで伝えられることとなったと想像されるが、別の問題として、朱熹がこの話を引用する際にどのような情報源に拠ったかは興味深い。この点に関して本書では、基本的に『小学』と『東都事略』の記述を比較しているものの、この時代の基本史料である『長編』の記述を利用してはなかつたため、評者としては関心を抱いて調べてみるきっかけとなった。結論からすれば、現存史料を見る限り、話の大筋として『東都事略』の記述が『小学』に最も近いのは間違いない、それと比較するのは妥当なことである。ただ本書一七二頁で、『小学』が『東都事略』から削除したとして挙げられている部分のうちの一つ「壽昌既仕而念母之不見也」は『長編』でもちようど抜けている箇所であり、やはり『長編』の記述も同時に検討しておいた方がより説得力を増したであろう。

三、「元明清時代の『小学』」について

本書第六章「元明清時代の『小学』」は、朱熹が精力を傾けて編纂した『小学』が、元・明・清とその後の時代にどのように受容されたかを論じたもので、長い時間軸を概観した章である。まだ朱子学が官学として確立過程にあった南宋から元代にかけては、朱熹の影響も色濃く残っており、『小学』は教育にしばしば用いられ、その結果として明初には『小学』関連の注釈書が複数刊行された。こ

れらは明の前半期にかけて盛んに読まれたと思われるが、明末になると科挙に合格する目的には不要であるとして、次第に読まれなくなっていく。それが清初には陸隴其らによって再び注目され、現在に至るまで広く読まれるようになったという。こうして見ると、もし清代に『小学』が再評価されていなければ、果たして現在にまでその姿をとどめていたかも疑わしく感じられる。すなわち『小学』受容の問題は、朱熹『小学』が現在にまで伝わり、我々が見ることができる状態にある、その過程にとって重要な意味を持つものと言えるだろう。しかしそうであるからこそ、この問題を僅か一章分、三〇頁弱の中で概括的に論じてしまうのは、もったいなく感じられるのである。というのも、全体の概観自体はおそらく正しいであろうが、それぞれの実証について仔細を見ると、本書でとりあげられる例には若干の問題も見られるからである。

例えば本書二六〇頁には、『小学』が地方学校のテキストとして用いられたことが論じられている。そこで挙げられる明初の例として、天順三年（一四五九）に山東の福山知県となった段堅の例が馮從吾『少虚集』から引かれている。この引用の日本語訳には一部に誤訳が見られるほか、この文章の出典は『少虚集』の『関学篇』によるが、『関学篇』は万曆三四年（一六〇六）の成立で、張横渠以来、宋元明の関中出身の儒者を列伝体で記したものである。当該部分と同内容の記述は『明史』段堅伝や『明儒学案』巻一にも見られ、一見して『関学篇』の内容が最も詳しいようであるが、もしこれを初出とするなら、その当時から約五十年ほど経て書かれたものであることには注意したい。併せて、ここで挙げられる「小学諸書」というのが具体的に何を指すのかも、より慎重な検討があつてよい

ように思われる。

また続く本書二六一頁に挙げられる『陳猷章集』の「程郷県社会学記」からの引用にも、日本語訳に一部問題が見られるほか、この記が書かれたのは成化一四年（一四七八）以降のことなので、段堅の例とあわせてこれらを明初の事例に含めるのは無理がある。この時代の分析は史料の困難が伴った可能性はあるが、時系列を意識しつつ、地方志や各種文集などを含め、より広い視野で史料を扱うことが求められる。例えば、段堅の例が関中という一地域における学統を現した『関学篇』に見られる点、陳猷章が広東新会県の生まれで、故郷新会県について書かれた文章の中でのみ「小学」に関する記述が現れる点などを考えると、地域や学統も意識しながら詳細に整理をしていけば、当時の小学盛行の様相をより具体的に描くことができるかもしれない。

次いで本書では、明末にかけて人びとから忘れ去られつつあった『小学』が、清代康熙年間になって再び注目されたことを論じている。康熙帝が朱子学を重視したこと、陸隴其が『小学』を再発見して評価したこと、童生試の出題範囲に『小学』も含まれるようになったことなどが指摘されるが、本書の記述からは、康熙年間の短い時間軸の中で急に起こった変化のようにも見受けられる。もしそうだとすれば、歴史学の立場としては、その原因をどこに求めればよいかが重要な問題となる。本書ではこうした清初から清中葉にかけての変化も、いくつかの史料から簡潔に述べるにとどまるが、康熙帝個人の意向が強く反映された結果と考えるべきなのか、あるいは社会全体で『小学』や朱熹の著作そのものを再評価するような動向があつて、それに皇帝などの政治権力が応えた結果だと考える

べきなのか、より詳細に検討することで、『小学』というテキストの立ち位置を具体的に捉えることにつながるであろう。

要するに、元・明・清を通じた『小学』の受容や盛行は、朱子学自体の位置づけと並行して展開していた可能性が高く、そうであれば、朱子学内部の学派や学統、さらには陽明学など朱子学以外の思想と比較したときの相対的位置などを念頭に置きながら、『小学』の受容をその中に位置づけていくことで、より発展性のある議論が展開できるのではないだろうか。本書第六章はその見取り図を示した点で価値があり、今後の発展を期待したいところである。

四、おわりに

ここまで本書の一部について、具体的に批評を加えてきた。とりわけ実証面については、歴史学の立場からやや厳しい評を述べているように見えるかもしれない。しかし本書全体としては、むしろ手堅い実証に基づき、無理のない論を展開している印象が強い。『小学』各条の整理などは丹念に行われているのが一見してわかり、時としてもっと踏み込んだ分析を読みたいと思うこともあったほどである。

先述したように、朱熹『小学』は朱熹の著作にしてはあまり注目されておらず、どのように分析するのがよいのかも、いまだ試行錯誤の段階にある。それを正面から取り上げて一書にまとめた価値は大きく、今後これを基礎にして、さらなる発展の可能性が拓かれたと言えるだろう。

最後に、この書評企画においては、著者の松野敏之氏、コーディネーターの三浦秀一氏、他の二人の評者の方をはじめ、多くの方と意見を交わすことができ、思想哲学を直接の専門とはしない私にとって大変貴重な機会となった。その意味で、あえて異なる専門の評者を入れて行われた本企画は、私にとって有意義なものとなったのは疑いないが、それが成功したか否かは今後改めて評価されることとなる。

また本稿の執筆に当たっては、本企画の関係者の方々との意見交換が反映されている。とくに明代の事例について述べた部分では、三浦秀一氏に多大なご教示を頂いた。ここに謝意を記したい。